

## 2023年8月13日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章6節

説教題：正しさに飢え渴く

先日、私は親戚の人の葬儀に参列しました。それは仏教の葬儀でしたから、お坊さんから故人についての話は何もありませんでしたが、キリスト教の葬儀では、多くの場合、司式者が故人の「人となり」のようなものを話すのを聞くことができます。もう、随分前に参列した葬儀ですが、司式者は故人について「この方は父親として本当に正しい人でした。正しさを大切にする人でした」と話をしました。信仰者であれば誰でも、自分の罪深さは認めながらも、少しでも正しく在ろうと心していると思うのですが、改めて「この方は正しい方でした」という言葉を聞いた時、その一言で、故人の人となりに触れたような気がして、今でも印象深く覚えていることです。

今日はイエスが語られた「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから」(5:6)という御言葉を学びます。「義に飢え渴く」とはどういうことでしょうか。「義」、辞書で引くと「正しいこと、正しい道、立派なこと」等と説明がされています。その意味で「正しいことに飢え渴く者は幸いです」ということになり、それはさらに「正しいことに飢え渴きなさい」という勧めの御言葉になります。では「正しさに飢え渴く」とは、どういうことでしょうか。

先週、マーチン・ルーサー・キング牧師の話をしました。彼がなぜ公民権運動に関わって行くようになるのか。アメリカ社会を覆っている人種差別の現実、そこで「神様、これで正しいのですか、これでああなたの『義』が、『正しさ』が、立つのですか」というような思いがあったからだと思います。合衆国憲法は「神の義」を謳っている。それなのに、現実としては「本当に神が世界を支配しておられるのか、であれば『神の正義』はどうなってしまったのか」と、神の支配を疑わせるような事実があったのです。そして「どうせ、こんなものさ」と祈ることを諦める、そういう雰囲気がありました。その中でキング牧師は「神の義、神の正しさ」に飢え渴きました。人々にも「神の義を求めよう」と励ました。そこからアメリカ社会がやがて手にすることになる大きな祝福が始まるのです。私達は、この生かされている社会において、「神の義、神の正しさ」に飢え渴かなければならないのではないのでしょうか。そしてその故に、正しさが成るように、もつという「神の義(正しさ)」が成るように」という祈りを止めてはならないと思います。それは、私達の身の周りの問題でもそうです。皆さんも身の周りに色んな問題を抱えながら生活していらっしゃることでしょう。時には、どう考えても納得できないこと、不条理なことに直面することがあります。「神様。これで良いのですか。これで神様の義になるのですが、納得出来ません」と思いの丈をぶつけたことがあります。だからこそ、そこで『神様の義(正しさ)』が成りますように」と飢え渴き、祈ることは大切なことだと思います。聖書的な祈りだと思います。

神は人を造られました。「詩篇」にはこうあります。「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」(詩篇 8:5)。「人間は素晴らしい者として造られている」とあります。その素晴らしさは、「義(正しさ)」、「神の義(正しさ)」に飢え渴くところに、素晴らしく生かされて行く秘訣があるのではないのでしょうか。以前、私は「ルワンダの虐殺」のことを調べたことがあります。残念に思ったのは、教会が虐殺に加担して行ったという事実でした。教会が権力者に近く在りすぎて、社会に「義(正しさ)」が成ること、「神の義が成ることに飢え渴くこと」、その大切なことが見落とされていたのではないかと感じました。今のウクライナ戦争でも、私達は感じるのではないのでしょうか。「ロシアにある教会は、本当に『神の義』に飢え渴いているのか。それとも、教会と国家の良い関係を守ろうとするだけなのか」、そんなことを思われます。イエス様は、この言葉を通して、『義』に飢え渴け、『正しさ』を求めよ、『神の義』が、『神の正しさ』が通る世界について執り成すことを諦めずに、また祈りから生まれる小さな業に生きることを諦めずに、『神の義』に渴いて生きよ」と言われるのではないのでしょうか。

その時、私達には励ましがあります。祈り会では「創世記」を学んでいましたが、「創世記」に「ノアの箱舟」の物語があります。神は人間を造り、人間社会を祝されました。しかし人間のあまりの

罪の酷さに、一度、人間社会に絶望されました。そしてノアの家族以外の人々を全部滅ぼしてしまわれました。しかしその後、神はまた、人間社会に望みを置かれ、それだけではなく「もう二度と滅ぼすことをせずに人間社会に望みを置き続けよう」と言われました。そして「そのしるしは空にかかる虹だ」と言われました。神様は、ご自分が人間社会を決して諦めておられないという証拠に虹を掛けられました。その虹はやがて、神の独り子を「救い主」として人間に与えて下さるという最も鮮やか虹として掛かりました。イエス様の誕生は「神が人間を諦めておられない、決して諦めない」というしるしです。神が人間社会を諦めておられないなら、私達は「神の義」が成るように、神の支配が見えるように、社会のこと、身の回りのこと、色々なことに敏感になり、「正しさ」に飢え渴き、問題の中で「神の義(正しさ)」が成ることを祈り求めて行かなければならないのではないのでしょうか。繰り返しますが、祈ることを止めてはいけないと思います。

さてしかし、ここで問題があります。(実はここからが本題と言っても良いのですが…)。「正しさ」を求めて祈る、そうする時に、私達がどうしても思い至らずにおられないのは、社会のこと、政治のことをあれこれと批判している、その当の「自分の正しさ」です。「自分の義」です。カナダの神学校で面白い講義を聴きました。「教会の何がおかしいか(何が悪いか)」という講義でした。始まって30秒もしない内に、講師は答を言いました。「教会の何が悪いか」、答：「私が悪い」。教会の一番の問題は「私が悪いこと」だそうです。「私が変われば、教会は変わる。それが全てだ」と言って、それが結論でした。3分で終わりました。その講義の中で、講師はフランスのある哲学者の言葉を引用しました。その哲学者は言いました。「世界で一番大きな問題は何か。それは私だ。私が悪いことが一番の問題だ」。(皆が本気でそう思えば、社会は変わるということではないかと思えます)。社会のために、あるいは身の周りのことでも、「神の義」が成ることを祈ることは大切でしょう。でも同時に私達は、「では自分の中には『義が、正しさが』あるのか」と問われるのです。その時、「悲しむ者は幸いです」(5:4)の御言葉の時に学んだように、自分の中にあるのは、むしろ罪の悲しみです。正しく生きようとしても、自己中心が頭をもたげる、「義(正しさ)」がない、そういう現実です。社会を見る前に、自分の足元がぐらついているのです。

しかし、それが私の真の姿であれば、「自分の中に『義』、『正さ』がない」というか、正しく生きようとしても生きられないのであれば、自分について「神の義」に飢え渴くことこそ、「私の中に『義』が成りますように、私が神の前に『正しく』生きられますように」、そのように自分について「義」に飢え渴くことが、まず大事ではないのでしょうか。だからこの御言葉を、ある聖書は次のように訳します。「神の前に、正しく良い者になりたいと、こころから願っている人は幸いです。そういう人の願いは完全にはかなえられるからです」(マタイ 5:6 「リビングバイブル」)。

しかし私達が、自分では願わないのに、罪に振り回されるというのは、それは、私達はその本性において墮落しているということです。では、どうすれば良いのでしょうか。「三浦綾子さんが結婚する時、夫の光世さんは、神様に『愛を下さい』と祈り求めた」という話があります。後日、光世さんはこのように言っています。「私の中には愛はない…ない袖はふれない…愛は『愛なる神様』から頂くより仕方がない」(三浦光世)。「義」も同じではないのでしょうか。自分の中に「義」がないのであれば、「義」は、神に願い求めるしか、神に頂くしかないのではないのでしょうか。だからイエス様が「義に飢え渴くように」、「義を求めよ」と言われた時、それはまた、「『義』のない自分のために、『義』に飢え渴け」、「神に義を求めなさい」、「神に助けてもらえるように、祈り求めなさい」ということでもあったのではないのでしょうか。

「神に義を求めよ」、「神に助けてもらおう」とは、どういうことでしょうか。宗教改革者マルチン・ルターについてこんな話があります。ルターは、修道院に入ってから、恐ろしい神しかイメージが出来なかったのです。罪人を裁く恐ろしい神です。だから信仰生活に平安がなかったのです。そんな時、「ローマ書 1章 7節」が彼の目に飛び込んで来るのです。「なぜなら、福音のうちには『神の義』が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」(ローマ 1:17)。彼はこの「神の義」を、「神の正しさ」と理解す

るのではなく—「福音のうちには『神の正しさ』が掲示されている」と読まないで—「神が不義な罪人を義と認めて下さるところの義」と解釈するインスピレーションを与えられたのです。「私は、自分の力では正しくあり得ない。裁かれるべき者だ。でもその私のために、イエス・キリストが地上に来て下さり、私の罪の一切を背負って—（過去の罪も、現在の罪も、将来の罪も背負って）—十字架に掛かって下さった。そのイエスの十字架を『私のためでした』と感謝して受け取り、イエスを『私の救い主』として信じるなら、神は、その信仰の故に、正しくない者を『正しい者』と認めて下さるのだ。その信仰によって、本来行くことの出来ない天国に行くことの出来る者と認めて下さるのだ」。この理解に至った時、彼は平安を得るのです。「ローマ書」には、こうもあります。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」（ローマ 3:23～24）。神が「義」と認めて下さるというのです。

こんな話があります。私達が地上の人生を終えて、神の裁きの前に立った時、悪魔が私達の罪の記録簿を持ってニコニコしてやって来るそうです。彼は、新しい魂—（私達の魂）—が手に入ると確信しています。なぜなら、その記録簿には私の酷い言動、それだけではない、憎んだことや、恨んだことや、その他諸々の心の思い、神に喜ばれない全てのことが書き込んであって、どう考えても私の地獄行きが決まっているからです。いよいよ悪魔が神の前で私達の罪状を読み上げようとして本を開いた時、悪魔の顔色が変わります。そして、その本をあちこちとめくって、そして呟きます。「おかしい。あんなにいっぱい書いてあった罪の記録が全部消えている」。イエス様の十字架を信じたというその一点で、私達の罪の記録は消されてしまうのです。これが福音です。私達には、「義」はない。私の中では「神の正しさ」は成っていない。でも「イエス様の十字架を信じます、こんな者が『神の子』という特権に与ることが出来るように、イエス様が死んで下さったことを信じます」、そう告白する時、神が「神の義」で私達を覆って下さるのです。私達を『義』がある、『正しさ』がある」と認めて下さるのです。「神に義を求める」とは、自分の罪を認めて、十字架を見上げることです。その時、「義」のない私達が、信仰の故に、既に「正しい者」と認められ、「正しさ」に生きようとする出発点に立つことが出来るのです。イエス様の十字架を見上げる時、神は何度も、何度も、「神の義」で私達の欠けを覆い、聖霊の働きを与えて、罪に支配されるのではない、「正しさ」に生きる、その出発点に立ち返らせ続けて下さるのです。やり直しをさせて下さるのです。

神が「義」のない私達を「義のある者」と認め、「正しさ」を求める出発点に立たせる、そんな環境を作って下さったのだから、そして私達に天国を喜びとする、そんな特権を与えて下さったのだから、その神の恵みにお応えして、精一杯「義」に飢え渴き、「正しく」生きて行こうとする、それが、イエス様を十字架に架け、私を神の子として下さった神様に、私達がせめてお返し出来ることだと思うのです。だから祈りたいのです。「神様、あなたは私の不義を赦して、神の『義』の衣を着せて下さいました。神様、あなたに『義がある』と認めて頂いた私です。だからこそ、あなたの恵みによって、精一杯『義(正さを)』求めることが出来るように、あなたの前に『正しく』生きることが出来るように、それを喜びとすることが出来るように、そのように助けて下さい、導いて下さい」と。この話は「信仰問答」で紹介しましたが、ある会社の社長秘書として働いていた女性がいました。ある時のこと、社長に電話がかかって来ました。社長は「留守だと言ってくれ」と言いました。彼女は言いました。「ご自分でどうぞ。私は、嘘はつきません」。社長は言いました。「業務命令だぞ」。彼女は言いました。「どんな場合でも、私は、嘘はつきません」。その時は、社長はカンカンになって怒りましたが、しかしそれまで以上に彼女を信用するようになったという話でした。こんな風に生きて行きたいと願います。

そして、イエスは「その人たちは満ち足りる…」(5:6)と言われたのです。新共同訳は「その人たちは満たされる」と訳しています。受け身形です。原文も受動態です。どうやって満たされるのか。この「義」という言葉は、『神との正しい関係』という意味だ」という理解があります。申し上げたように、私達が、自分について「神の義」に飢え渴いた時、神はイエス様の十字架を通して、「飢

え渴き」を満たして下さるのです。罪を赦して、何度でも「正しい」として下さるのです。私は、神が赦しを語って下さった時の喜び、衝撃を忘れることが出来ません。今も神は、私達に聖霊の働きを与えて、飢え渴きを、神との関係を、満たし続けて下さるのです。

であれば—(初めに戻りますが)—私達が、自分の「義」だけではない、自分の回りの問題、社会の問題、神の支配が見えないような状況で、「神様、これで良いのですか」と「神の義」に飢え渴く時、神はそれも満たして下さるといふ希望を持つことができるのではないのでしょうか。私達は、「神の支配」が見えないような問題の中でも「神の義」に飢え渴き、希望を持って祈り続けて行くことが出来るのではないのでしょうか。

イエスご自身が「不義」な世(社会)にあつて「神の義」を求めて生きられました。最後には「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」(マタイ 27:46)と、「これで良いのですか」と、「神の義」に対する飢え渴きの叫びを上げて死なれました。しかし、そのイエスの叫び、飢え渴きに答えるかのように、神はイエス様を甦らせたのです。人の世の一番外側には「神の支配」があるという現実を見せて下さったのです。イエス様の飢え渴きは、満たされました。やがてイエス様を殺したローマはキリスト教国になつて行くのです。「義」に飢え渴き、「義」を求めて生きたイエス様は、神によって満たされました。それは「義に飢え渴く者」はやがて必ず満たされる、その保障を与えているのではないのでしょうか。問題に対する飢え渴き、それがいつ満たされるのか、それは分かりません。キング牧師の運動のように、地上で満たされるかも知れない。もしかしたらそれは、天国で主にお会いする時なのかも知れない。それでも良い。何よりイエス様が「(その人は)幸いです」と、「そこに幸いがある」と約束されるのです。私達はその言葉を信じるのです。信じて、身の回りの問題に対しても、「神様、これで良いのですか」と、「神の義」に飢え渴き、祈り続け、祈りの中で示された「正しい」道に生きるのです。ルターは言いました。「『義』のために、あなたの手を、あなたの足を、あなたの体を捧げよ。為すべきこと、為せることは、全て為せ」。マザー・テレサは言いました。「私達の行いは大河の一滴かも知れない。でも何もしなければ、その一滴も生まれない」。神に「あなたは良し」と認めてもらっている者として、精一杯、神に喜ばれるように、生きて行きたいと願います。